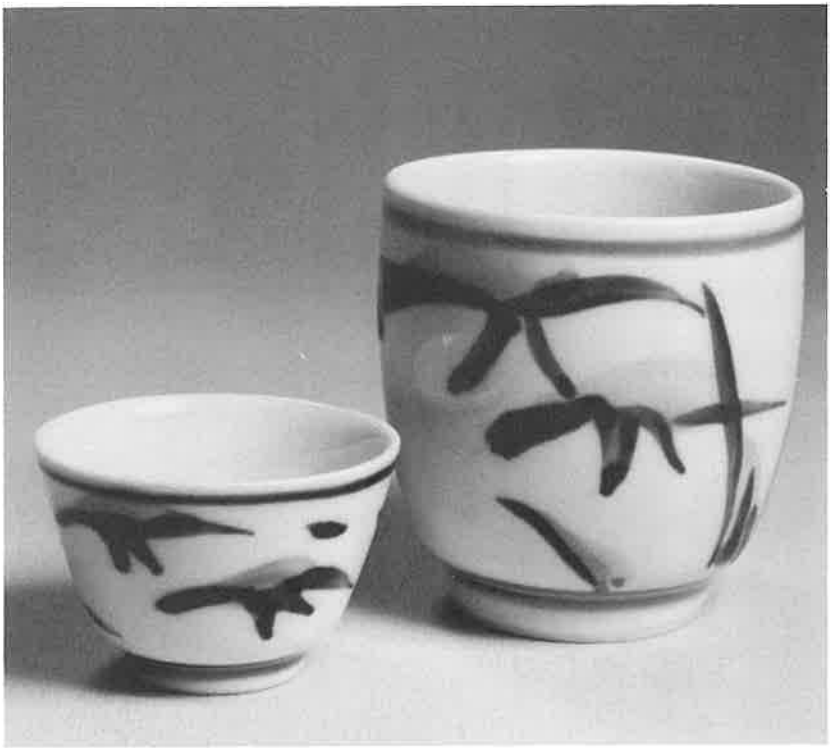
近藤 悠三 先生の茶碗

中村 正信

近藤悠三先生の茶碗は数が少ない。先生は『染付の人間国宝』であり一般には壺とか皿とかの大作の作家として知られている。又先生ご自身もよく申しておられたが『初めから茶碗だけやっていると片寄った作品となり良いものが出来ない。いろいろの作陶を重ね、これをこなし得てそして茶碗』と。

先生とは三十八年間の親交でしたが、先生は若い時から古今の名品を学び研究しており当時でもかなりの作品をつくっておられた。又方々に研究旅行をするとそこで茶碗もつくっている。朝鮮、相馬焼、志野、常滑、赤はだ焼、ペルシャ、伊羅保等、それに色々の灰釉系のものや、天目、赤地金彩、染付等がある。灰釉ものでは変わったところでは清水寺改修時の古い檜皮の灰釉を使ったものがある。

先生の作陶ぶりは、一つの命題を決めるとそれをとことん研究しそれが手に入るまで追求するやり方である。例えば壺に写す絵付にしても浅間山噴煙は七年、松は十五年、富士は二十年余の歳月を要している。夫々の壺の形と絵付の一体性を探究し納得ゆくまで追求してゆく。よく旅行先でも絵付用のスケッチをされていた。伊豆に遊んだ時のこと松のスケッチを朝から夕方迄写し続け何十枚となり、それを八畳間一杯に並べ



て二人で楽しんだことがある。富士は一度手がけたが霊峰富士の偉大さを十分写しとることが出来ないで苦節を重ね二十年余かかって漸く最晩年になって納得のゆく作品が出来、是れが今名品として残されている。

茶碗をつくるのにも同じ様な追求の仕方である。『ろくろを廻していると土が手に入り自然に寸分違わないものが次々出来るのにあきたらず真暗闇の中でつくっても同じものが出来た。然しそれが名品とは限らない』と。この様にろくろを徹底して研究していたから若い時に陛下のご前で京都代表としてろくろをおめにかけたこともあり、又大先輩である浜田庄司先生にろくろを教えた人でもあった。

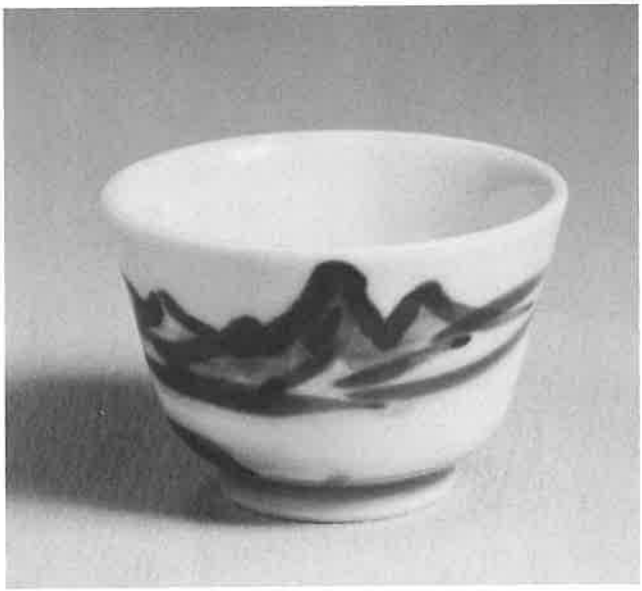
先生の茶碗はろくろが皆すばらしい。重心が低くのび〳〵と安定しており、そして温みのある作品である。

晩年になってから先生独自の世界である染付茶碗を手がける様になった。初めは土ものに試みていたがその内に最も難かしいとされる磁器に写し、更に追求してしぼり手の世界を手に入れている。

先生の染付はその雄渾な筆捌きがきわ立っているがそれを更にしぼり手に発展させ、深い味わいのものとしている。唯、数は極めて少ない。

先生とは二人でよく茶を汲み交しながら茶碗の育つ仮定を楽しみました。

茶碗は使って初めてどんどん変化し本当の姿をあらわすのだが、その



時先生の茶碗は形がますます安定してゆき、ろくろの良さがあますところなく現出する。又紅志野にしても初めは紅色が口辺に二、三点あっただけで上釉も平坦にかかっているだけだが、三十年一生懸命使って育てみると、上釉は生地にくい込み、虫喰いが出来、更に玉の様になってあたかも雪の降った感の茶碗になった。紅色も程良い色調で茶碗全体に出ている。この不思議な変化は驚くばかりである。これが茶碗の生命力と云うのであろうか……。

茶碗も生れて、そして育ち一人前のものとなる。先生はこれを『生みの親と育ての親』と云って居られた。

拝見したところ近藤先生は陶芸家でありましたが私には一人の修行者とうつりました。佛の教えの道をひたすら歩き続けた修行者でした。最晩年になり申しておられましたが、『最近うれしいことがある。阿彌陀様に私全部をお願いし、その肩越しに筆を動かしていると実に楽に仕事が出来る』と。

先生が亡くなられてから初めて仕事場と、もう一つ隣室の先生が想を練られた小部屋を拝見し、深い感動を覚えました。そこは正に佛壇の中に入った想いでした。